

Title	近代日本におけるアマチュア合唱：受容から運動へ
Author(s)	山口, 篤子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57876
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【45】

氏名	やまぐちあつこ 山 口 篤 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 23499 号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	近代日本におけるアマチュア合唱—受容から運動へ—
論文審査委員	(主査) 教 授 根岸 一美 (副査) 教 授 天野 文雄 准教授 伊東 信宏

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近代の日本において合唱音楽がどのように受容され、その音楽をめぐる営みがどのような意義をもってきたかを、1900年前後から1940年代前半までにおける特徴的な出来事の考察を通して明らかにすることを目的としており、第1～3章、および終章から構成されている(A4判148頁)。

第1章「明治・大正期の合唱観の変遷と活動の実際」では、1900年前後から1920年代前半までを対象とし、当時の人々が合唱をどのように理解し、その受けとめが実際の活動にどのように反映されたかに注目して考察が行われている。その結果、1900年前後の時期に東京音楽学校の関係者によって書かれた論考は、音楽的・美学的見地から合唱音楽の特性を論じるものであり、啓蒙的な内容ではあるが、実際の活動が担う社会的機能については考察されていないこと、それに対し、洋行経験者や海外の情報に敏感な人々は、西洋音楽の普及のために「活動」という観点から合唱をとらえ、その意義を考えるようになっていたことが明らかにされている。後者の考え

方はのちの民衆音楽運動に引き継がれ、さらには行政による社会教育と結びつくが、しかし大正期には「日本で最初」を標榜するプロの合唱団も誕生し、芸術音楽としての合唱を追求していったのであり、本章は、合唱活動の大衆化と芸術性の追求というふたつのベクトルがこのように現実のものとなっていたことを明らかにしている。

第2章「国民音楽協会の合唱競演会」では、小松耕輔を代表者とする「国民音楽協会」によって1927年に開始された「合唱競演会」についての考察が行われており、これが近代日本の合唱運動において重要な意味をもつコンクールとして、戦後の運動にも深く影響を及ぼしたことを明らかにするとともに、その開催までの事情や実際の開催状況の分析を通して、社会運動としての合唱のあり方、合唱競演会がアマチュア合唱の成立にどのようにかかわったかを論じ、前章でみた大衆化と芸術性の追求との相克を体現する出来事であったことを述べている。

第3章「『幻の東京オリンピック』と合唱運動」では、1940年に開催されるはずであった東京オリンピックと合唱運動とのかわりについて論じている。それまでの合唱運動の流れにのって、あるいはまったく違う方法で、オリンピックのための大合唱団をつくろうという動きが起こったことに注目し、その運動の詳細を探るとともに、その作業を通じて、当時の人々がこの出来事に合唱運動の何を託したのかを検討している。そして、オリンピックの開催という外的要因によってはじまった合唱運動の組織化が、それまで関心のなかった人々の意識を合唱へ向けさせ、合唱が社会的に用いられる場を広げたという点で、合唱受容の転換点となったと述べている。

終章では、それまでの3つの章でとりあげた事例を「合唱団」という組織の誕生とその広がりという観点からとらえ直すことを試みている。そして合唱団の活動が、アマチュアの営みとはいえ、日本の近代化の道程とかけ離れたものでは決してないし、逆にアマチュアが主体であるからこそ、社会の様相が色濃く反映されることもあったと述べ、結びとしている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

洋楽受容史研究において、合唱という分野はこれまでほとんど問題とされてこなかったが、その理由として考えられるのは、その主たる担い手がアマチュアであり、彼らの趣味の領域での話だという認識である。また、主体がアマチュアであることが、資料の散逸にも直結しており、それもまた合唱の受容研究を困難にする要因となっている。本研究はこうした状況認識のもとに、国民音楽協会主催による合唱競演会のパンフレットを中心とする資料を掘り起こし、対象とする出来事を丹念に再構成することに力を注いでおり、これまでの洋楽受容史研究の欠落部分を補う意欲的な成果となっている。本論文に関する口頭試問は、2010年1月30日(土)、およそ1時間30分にわたって実施した。そこでは、1)アマチュアの活動という観点から見たときに、合唱に限定した意味が理解しにくい、他の分野での活動についても探究し得たのではないかと、2)受容研究として、やはり作品についての研究もほしい、3)一つ一つの運動をめぐる異なる見解があったと思われるが、それらの相互の間の論争という面があまり表面に現れていないため、文化状況の展開という面でスタティックな感じを否めない、4)音楽以外の文化領域についての関心

ももう少し取り込んでほしい、といった指摘が行われた。またさらに、5) アジアの他の国における状況との比較考察もほしい、6) 外国語の文献も取り込んだ研究であることが望ましい、7) 東京オリンピックなどの状況説明において、当時の批判的立場からの言論などについての解説も必要ではないか、といった指摘や要望も示された。これらに対する申請者の回答は、的確に行われ、加えて、東京以外の地域における状況や、合唱運動とメディアとの関係、さらには仏教界における合唱活動についても、研究を進める必要を示し、今後の展開を十分に期待させるものとなっていた。以上の成果により、本論文を、博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。